ソフトテニス部員 全国カッターレースに出る

発行
函館水産高校3年
有馬　瑠人

惨敗だけど、出てよかった

平成二十八年七月二十一～二十二日の二日間、全国の水産高校と海洋技術短大の合計十六チームが、青森県八戸市鮫漁港に集まって、カッターレース大会が行われた。私は、函館水産高校クルーとして、ソフトテニス部の仲間と一緒に出場した。

練習期間一ヶ月

函館水産高校はカッター部がなくて、全国カッターレースに出場する場合、チームを作るのが大変です。今回も、クルーが集まらなくて、私が在籍しているソフトテニス部が練習の一環として出場することになりました。このような状態ですから、私たちに与えられた練習期間は、六月から大会まで、一ヶ月しかありませんでした。

練習は、オールを揃えることから始まり、ストロークの長い漕ぎ方を教わり、連日、放課後、函館湾内七重浜沖で練習しました。

函館山をバックに練習するクルー

シーマンシップ

教えてくれる先生は、「速く走ることも大事だが、練習を通して“シーマンシップ”を学んでほしい」ということでした。

練習中に青森行きのフェリーが函館港を出て行く時には、フェリーに対して「櫂立て」をして敬意を表しました。私たちにとって「櫂立て」はしんどく、（関係ないフェリーに櫂立てしなくてもいいじゃん）と思っていましたが、先生は、**「同じ海に生きる者、心の通い合いがあってもいいんじゃないか。それに、みんなの先輩が船からみんなの頑張る姿を見ているよ」と言いました。**

練習レース

全国大会出発直前の七月十九日。校長先生を筆頭に先生方が練習レースをやってくれました。

（年寄り相手か。やる気が出ないな）と思ってかかりましたが、やってみたら先生方の速いことに驚きました。忙しいのに、自分達のためにカッターを漕いで、体を張って自分達の慢心を戒めてくれた先生方に感謝でした。

練習レースを終えた教員クルー

速いじゃん

出発前日。練習納め。練習を開始した六月初めに比べたら、格段にオールも揃い、艇のスピードも速くなったことにみんな驚きました。明日は出発。

全国大会は・・・ 地獄 ～ 天国

今年の三月に開業した北海道新幹線「はやぶさ」に乗って新八戸駅で降り、大会会場がある鮫駅に向かいました。

真っ黒に日焼けした、体のゴツイ高校生が同じ車両にたくさん乗っていました。全国カッターレースに出る他校の選手でした。見るからに強そうで、それまではしゃいでいた私たちは自然と下を向いてしまい、鮫駅に到着するのを待ちました。

公式練習

私たちは午後四時から一時間の公式練習があり、勇んでカッターに乗り込みました。（よーし。やってやるぞッ）と漕ぎ出し、スタート位置の「トグル」を取りに向かいました。何と、うまくトグルを取れないのです。ようやく取ったと思ったら、その間にカッターは風下に流され、スタート位置に戻すのが至難の業でした。

他校が練習時間内に何往復もレースコースを走っているのに、私たちは一往復しか走れませんでした。場違いな所に来たのではと思い始めました。

公式練習後の重苦しいミーティング

追い打ちの失格

予選第一レース。トグル取りに苦労しながらスタートしたのですが、回頭ブイに接触して「失格」。参加十六校中、一番スピードが遅いことは、昨日の公式練習でわかっていましたが、「失格」というおまけまでついて、恥ずかしくて、恥ずかしくて、顔から火が出る思いでゴールを目指しました。

予選第１レース「トグル取り」

「頑張れ～」の声

私たちより数分前にゴールした三艇のクルーは、

（何もたもたやってんだよ。早くゴールせーや）

と怒っているちがいないと思って漕いでいたら、三艇のクルーから、

「頑張れー。あと少しだッ」

という声が聞こえて来たのです。岸壁でレース観戦していた大勢の人たちの声援も聞こえてきました。

（なんて優しい人たちなんだろう）

と感動し、逆の立場だったら、自分はこのように振る舞えるだろうかと考えました。

午後から行われる敗者復活レースは、この人たちのためにも、私たちの持てる力の全てを出し切って漕がねばならないと思いました。

優しさに報いるために

第一レースを終えて上陸した私たちの艇の艇指揮、艇長であるソフトテニス部女子マネージャーふたりは、感激して泣いていました。

「何て優しい人たちなんだろう」と。

レース後、ふたりは監督の所に行って、風に流されないでトグルを取る操船法と、回頭ブイに接触しない操船法を再度確認に行きました。

ケツ上げダッシュ

敗者復活レースが始まる。私たちは何とかスタート。そして問題の回頭ブイ。大回りでしたが無事回頭。私たち男子クルーは、お尻を座席から離して、全体重をオールにかける「ケツ上げダッシュ」を二箇所で入れました。遅くても全力を出し切るのが優しさに報いることだと誓ったからです。

みんな一体になって

声が命の艇指揮は声を枯らしてしまい号令できない。その時、艇長がすかさず代わって号令をかける。

岸壁では、校長先生、テニス部顧問、補欠の一年生が「頑張れー」と大声を出しながら走ってカッターを追っている。まさに地獄から天国を味わった瞬間でした。参加してよかった。

全レースを終え笑顔が出たクルー

1/30　9mカッター300円

本当に300円?

下の写真は、平成十八年に札幌市商工会議所主催で行われた「高校生ひらめき甲子園」の函館水産高校展示ブースの写真です。この時、本校の先輩は「水産高校生の魂“カッター模型（1/30ｽｹｰﾙ）」を300円で販売する商品案を持って参加したそうです。当日は、大人から子どもまで、訪れる人が多く、カッターの存在を初めて知る人、船模型としての完成度を吟味する人など、また、「本当にこの模型キットが300円？」と、驚きの声が上がる人気ブースのひとつだったと引率した先生が話してくれました。

水産高校生の魂

年配の方には、帝国海軍で必ずやらされ、手の豆は破れ、お尻は赤むくれ、それがカッターだというイメージがあります。まさしくその通りです。でも、「チームワーク」や「へこたれない精神」を養うには、カッターは最高で、まさしく“水産高校生の魂”です。

平成18年　高校生ひらめき甲子園

北方領土問題をカッターから考える

郡司大尉　カッターで千島へ　明治26年3月20日、大日本帝国の領土である千島列島の主権を守るために、東京の隅田川からカッターを漕いで旅立った一団がいた。その一団の名は「報效義会(ほうこうぎかい)」。リーダーは郡司成忠海軍予備役大尉。団員は同じく海軍の予備役兵士達を中心に、一部、陸軍兵士も参加した。陸軍兵士の中には、後に南極探検を果たす白瀬矗がいた。

なぜ千島へ　明治8年に、日本とロシアの間で結ばれた「千島－樺太交換条約」によって、千島列島は正式に日本領となった。ところが、千島は、高級毛皮を手に入れるために、諸外国によるラッコの密漁が横行していた。宮沢賢治の「銀河鉄道」の主役であるジョバンニの父もラッコ猟を職業としていたために、ジョバンニは同級生からさげすまれている。

カッター転覆　日本領である千島列島での主権を守るために、郡司らはカッターで北の海へ漕ぎ出した。ところが、青森県八戸市種差海岸沖でカッターが転覆して、団員の中に犠牲者が出てしまった。この犠牲者を弔うために、八戸市の浮木寺に慰霊碑が建てられ、私は、全国カッターレースの前日、この寺を訪れ、慰霊碑に向かって手を合わせた。

郡司大尉短艇行溺死者紀年碑

慰霊碑前で思ったこと　（よくここまで隅田川からカッターを漕いで来たな）という驚きと、（無念だったろうな）ということを思った。その中でも、私たちは、北方領土問題を考える時、郡司大尉らの思いや志を風化させないで、受け継ぐことが大事じゃないかと思った。

全国カッターレース八戸大会はビッグチャンス　浮木寺がある八戸市で全国カッターレースを開く時は、郡司大尉らの歴史を高校生カッターマンに伝えるために、浮木寺境内で開会式を行うことは、少しでも多くの人に北方領土問題を身近な問題として考えてもらう絶好の機会だと思った。

溺死者紀年碑を拝む私

隅田川から八戸への短艇行　郡司大尉らが船出した隅田川は、今、東京スカイツリー人気で注目の場所である。さらに、来年早々、プーチン大統領が来日する。隅田川で「報效義会」の船出を再現するイベントの企画をしてみてはどうだろうか。郡司大尉らの千島行を再現し、そのような日本人がいたことを知ってもらう。東京周辺の短艇を所有する学校などでイベント開催できればと思う。

津軽海峡を渡ったカッター

上の写真は、本校が昭和十年に開校した直後の写真である。本校は廃校になった函館商船学校の全てを受け継いでスタートしたため、陸上帆船が堂々たる姿で校庭にあった。

さて、写真左隅に、傾いたカッターが一隻写っている。このカッターは、商船学校の生徒が、学校の許可なく津軽海峡に乗り出して、往復したカッターであると本校の記念誌である「函水四十年史」に書かれてある。さらに続けて、「この生徒たちは、教官に激しい叱責を受けたが、その後、『商船学校の生徒としては評価できる』と教官に褒められた」というような内容のことが書いてある。

昭和10年、開校直後の函館水産学校

次に、下の写真は、今年の全国カッターレースに出場したチーム写真だが、選手の背景にカッターが写っている。このカッターは、「記念艇一号艇」として長く展示保存されていて、この艇の特徴は、三番と四番のスオートと、十一番、十二番のスオートの二箇所にマストステップがあり、帆走の時はマスト二本で帆走できることだ。

記念艇1号艇の1/30模型

記念艇1号艇（生徒の後方）

本州の水産高校で勤務経験のある先生がいうには、「たいてい、一本マストが普通なのだが、函館は商船学校の流れを汲むから、タッキングしやすい二本マストなのではないか」と教えてくれた。

上の写真は、本校の模型愛好会が作った、「記念艇一号艇」の三十分の一スケールの模型である。長く語り伝えたい一号艇である。

編集後記

ソフトテニス部の私が、カッターレースの全国大会に出るなど想像もできませんでした。一年生の時、カッターを漕いだことはありますが、数回だけで、カッターの感想は・・・・、

（体力的に大変な実習だけど、カッターで乗り出した海の上は、とても気持ちがいい）

という記憶があります。

出場が正式に決まって、放課後の練習はやはり体にきつくて、

（本当にやれるのかな）

と不安に思うこともありました。

「練習は人を変える」の言葉とおり、だんだんカッターを漕ぐ体になって、オールも揃い始め、スピードも出てきました。本番が待ち遠しく思うようになりました。

いざ本番。他校のカッターに対する熱気と艇の速さに圧倒されて、甲子園球場に草野球チームが混じり込んだような感じで、公式練習の最中から私たちは意気消沈しました。

第一レースは、スタート位置に着くところから大変で、回頭ブイタッチで失格。ところが他校の選手も観客もみんな私たちがゴールするまで声援してくれて、感動しました。

この大会に出て、カッターは速く走ることだけでなく、カッターを漕ぐ者同士の強い絆を感じました。

帰ってきてから、この新聞を作りながら、函館商船学校と本校の関係や、郡司大尉のこと、本校のカッターへの取り組みの歴史まで、カッターについてさらに深く知ることができました。

写真の提供や過去の歴史を教えてくださった我妻先生に心から感謝いたします。